



2022年7月号(No.12)
公益社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
東京都千代田区四番町5-4
<https://www.jac1.or.jp>
編集担当: 新井 梓

3カ月に一度発行する「山」YOUTH版では、YOUTH CLUB 世代の会員のご活躍、東京や各支部のYOUTH CLUBの取組みなどをご紹介します。話題のご提供や感想など、ご意見何でもお待ちしております！

支部交流のススメ——①

御在所の豊かさ——クライミングとその前夜

5月21日～22日、御在所岳で本部青年部と東海支部、広島支部の交流会が行われた。あるご夫妻の結婚祝いがきっかけで、カンチュンナップ北西壁初登攀報告会や御在所クライミングにつながり、地域や人の垣根を超えた楽しい集まりに。

御在所で東海山岳学生連盟のOB・OG同士の結婚披露パーティーが企画された。参加予定の松原尚之ユースクラブ委員長の「今度、御在所に行く」が独り歩きした結果、本人達を知らない青年部や広島支部のメンバーが次々に参加を表明し、多くの人で祝おうではないかという企画になった。東海支部の高橋玲司支部長の取り計らいもあって、あわせてカンチュンナップ北西壁初登攀報告会や各種の催しもご用意いただき、当日は50名あまりが参加する盛大なイベントとなった。

会場の日向小屋に着くと雨がぱらついており、我々青年部組は岩場には行かず麓のクライミングジムに向かった(後で知ったが、雨の中、登っていた猛者もいた)。ジムのオーナーは初訪問の私たちにも気さくに話しかけてくれ、地元シークレット岩場のトポをくださるなど一同好印象を持った。

練習を終えて日向小屋に戻ると、人が数倍に増えており、宴の準備が着々と進んでいた。知っている仲間が取り持ち、あるいは知らない者同士で自己紹介をする。そうこうするうちに所属ごとにとま

た自己紹介タイムが始まった。

宴が盛り上がってきたところで、坂部信一郎さん、佑実さん(南山大学ACのOB・OG)の結婚披露が行われる。幼少期を振り返る微笑ましい動画、お二人の仲間と佑実さんによる生演奏が山域に響き渡る、アットホームで暖かい素敵な時間を過ごした。信一郎さん、佑実さん、改めましてご結婚おめでとうございます。

東海支部・山田利行さんによるカンチュンナップ北西壁初登攀は、ここでの報告が初とのこと。カナダでの経験をヒマラヤに応用し、氷のコンディションにも恵まれたようだ。登攀中は常に“想定外”が見え隠れしていたはずだが、一つずつ丁寧に、困難をクリアしてきたことが伺えた。山田さんとペアの谷剛士さん、改めまして北西壁初登攀おめでとうございます。

テーブルには、サラダ、ポトフ、ジビエの焼肉、ビールサーバーの持ち込み、そこに各地からの酒、肴の差し入れが並び、宴により一層の彩りを添えた。

翌朝、期待にこたえて晴れ。各パーティーが目的とする岩場に向かう。方々で聞こえるコールが知った方の声だ。響き渡るその声を聞きながら登れることは、なんだかとても心地よかった。

今回、御在所が人を惹きつけてやまない地域であることを再認識した。集う人の多様性、岩場・山域を愛する地元の風土、また人柄。盛りだくさんの企画にまとめ上げた、御在所岳のお膝元・東海支部の皆様情熱。豊かさを内包した御在所だからこそその素敵な2日間であった。



挨拶をする高橋玲司・東海支部長と集まった面々

支部交流のススメ——②

ヒマラヤ登山塾と六甲クライミング交流会

もうひとつの支部交流の話題は、6/25 関西支部主催の第7回ヒマラヤ登山塾への合同参加と、翌日の六甲クライミング交流会だ。こちらもかねてより続けてきた交流から飛び出した企画である。

雑踏に右往左往しながら会場の大阪梅田第2ビルに向かう。1Fに登山用品店ロッジが入っているから、知っている方も多いただろう。業務用エレベーターで地下4Fの会議室に向かうが、通路は薄暗く倉庫部屋が並んでおり、ヒマラヤ登山塾の会場があるとはとても思えない。通路最奥が会場だ。恐る恐るドアを開けると、目の前には本日の話者であるヒマラヤ登山のスペシャリスト、重廣恒夫氏がいた。

まず手渡されたのは約70ページにも及ぶしっかりとした資料だ。内容は毎回のテーマに即したもので、いずれも読み応えのあるものが用意されている。資料を手にしただけでヒマラヤ登山塾の凄みを感じる。

今回のテーマは「五大宝蔵の山カンチェンジュンガ縦走」。話は計画段階から始まった。数時間前のことと錯覚するリアルな状況描写に聞き手は没入してしまう。豊富な写真を交えた内容は嬉しい。資金集めの裏話や、アタック時の会話、計画終了後のこぼれ話と、フルコース料理さながらの2時間はあっという間に過ぎた。スライドが終わり、パッと電気が点けられたことで、我々一同はヒマラヤから都会の不思議な会議室に戻った。

内容詳細はここには記さない。参加者だけが知ることのできる特権、と格好よく言いたいのが、実際は描写が不可能だと感じた。この会議室で重廣氏から直接聞くのが登山塾の真骨頂。そしてこの登山塾はどなたでも参加可能だ。

普段の参加者に加え、広島支部、本部青年部から参加者が押し寄せたため、我々のために特設回を設けていただいた。終了後は、関西支部のルームで自己紹介を兼ねた懇談会を行い、さらに重廣氏を囲んだ交流会も開かれた。泊まりの参加者は同宿を用意



ヒマラヤ登山塾後の交流会にて重廣恒夫氏を囲んで

していたため、夜遅くまで山や会への想いを語り、話に花を咲かせた。

登山塾を起点とし、様々な方と素晴らしい交流をすることができた。

◎登山塾翌日の楽しみ〜クライミング交流会

翌日は、国内で最も古くからクライミングが行われていた岩場のひとつ、六甲・^{ほうるいわ}堡壘岩に集まった。このクライミングは、関西支部の竹中雅幸さん、広島支部の勝田直樹さん、青年部の中谷康司^{やすし}部長が、これまでも様々な企画で顔を合わせていたため、ヒマラヤ登山塾にあわせて企画したものだ。このクライミングから合流した人もおり、催しを起点とした繋がりを改めて噛み締める。

堡壘岩の岩場はいくつかのエリアに分かれており、それぞれが思うにまかせて登る。グレードも様々で、登っても楽しい、登りを観ても楽しいクライミングとなった。

本稿で何より伝えたいことは、じわりじわりと一緒に時を重ねる仲間が各地に広がっていくことの心地よさである。気心知れた山仲間とも、最初は“はじめまして”だ。他支部との交流は、そうした新しい出会いと、自分が知らなかった登山の楽しさを教えてくれた。他支部の催しに参加してみれば、それがいかに素敵なものか、気づかれるだろう。

(青年部・前川晋也(前頁も))



◀ヒマラヤ登山塾：月1回開催
詳細は関西支部 HP 最新の「関西支部報」で

■ 学生部活動レポート

学生部主催「海外登山勉強会」を開催

今年5月、ユースクラブでは海外登山を目指すための勉強会を立ち上げた。すでに2回を実施し、いずれも海外遠征の経験者によって臨場感ある詳細な報告がされた。

永らくコロナ禍によって活動が停滞していた学生部ではこの春から大学山岳部による海外遠征を目指した海外登山勉強会が開催されている。今日までに2回実施されておりオンラインも併用しながら10校近い大学から40人程が参加した。

第1回目は5月26日に明治大学山岳部OBの宮津洸太郎さんが講師を務め2015年のジャネII峰遠征や2018年のチャムラン遠征での経験を語った。

内容は学生にとってのヒマラヤ遠征という点から始まり国内でのトレーニング、現地での申請や買出し、装備の輸送といった準備のように遠征中に限ることなく実際に行くのに必要となる内容で行なわれた。

ヒマラヤ遠征にかかる期間についても触れられ、ヒマラヤではキャラバンで多くの時間がかかることが解説された。そこで日程を確保しやすい学生のうちにヒマラヤへ目を向けることが提唱された。

第2回目である勉強会は6月30日に中央大学山岳部OB かずたか吉田一貴さん、東海大学山岳部OB ゆう西田由宇さんが講師を務めた。

内容は同2名と当日は別の遠征のため欠席であった早稲田大学山岳部OBの鈴木雄大さんの3名で今年の4月から5月にかけて行なわれたハンター北壁ムーンフラワーバットレスへの遠征について語られた。

こちらも馴染みのないアラスカの内容や交通手段など実際に遠征に向かうために必要な内容が語られ参加した学生は熱心にメモを取っていた。

他、ハンター北壁以外の登攀ルートなどの紹介

があり、ヒマラヤでの遠征スタイルとは別の海外でのアルパインクライミングについて紹介された。その中でムーンフラワーバットレスよりも易しいルートがあり氷河からのアプローチが良いことも挙げられ、前回とはまた異なる海外でのアルパインクライミングを在学中に行なえる可能性が示されることとなった。

勉強会でも触れられていたが日本山岳会学生部隊が1966年にハンターを訪れ、西稜やフォーレイカーを登頂している。かつては海外遠征が活発だったことが伺い知れる。近年では大学山岳部の規模の縮小。追い打ちをかけるように、コロナによって遠征どころか普段の合宿をも制限されてしまい山から遠ざかってしまった。

しかし、このような勉強会を通じてまた海外遠征を志し今後の日本山岳会を牽引する人材が育てられていくことを期待したい。

今回の海外登山勉強会は9月22日に松原尚之ユースクラブ委員長を講師に迎え、高度順応などについて解説される予定となっている。

(学生部前副委員長・田島圭悟)



第2回ハンター北壁遠征の報告のようす

★ユースクラブ委員会企画

「山研に泊まって上高地の自然を学ぼう」を実施

ユースクラブでは、上高地の山岳研究所を活用した植物観察企画を実施。管理人の山田和人さんに案内をお願いし、周辺の植生を観察しながら空気のおいしい上高地を散策した。

6月25日～26日の2日間にわたり、「山研に泊まって上高地の自然を学ぼう」と題して、ユースクラブ委員会主催での自然観察会を実施した。講師は上高地山岳研究所（山研）の管理人の山田和人^{かずひと}さんをお願いした。山田さんは植物への造詣が深く、以前にも植物観察会で講師を務めていただいたことがある。私たちユースのメンバーは、親愛の気持ちをこめて、大学山岳部時代のニックネーム「ポールさん」と呼んでいる。

参加者は、松原ユースクラブ委員長ほか5名で、はるばる沖縄からの参加者もあった。

1日目は昼前に上高地入りした。朝の松本市内は梅雨とは思えない快晴、気温も30℃を超えており、すでに真夏の様相を呈していた。上高地につくと下界とは異なり、爽やかな気候であった。

早速、ポールさんの案内により、梓川の右岸、岳沢湿原からの散策が始まった。春の花のニリンソウや、ラショウモンカズラの花を見るには少し遅かったようではあるが、レンゲツツジのオレンジ色の花がまず目に入って来た。湿原とレンゲツツジのコントラストはとても印象的であった。

散策路を進んでいくと、大きなイチイの大木が現れた。成長が遅いため、周りの木との生存競争の中で、より日光を得ようと多方向に枝が出ており、特徴的な姿をしていた。

解説の中で、参加者一同印象深かったことは、樹木たちにも、激しい生存競争を繰り広げており、いかに自分の種を残すか、そのために意思をもたないはずの木が、まるで自分の意思を持っているかのよう、早く成長しより多くの日光を得ようとしたり、

隣に生えている木に巻き付くように生えたりと、動物の生存競争のそれとは比較にならないほど長い年月をかけた競争の真最中であることには只々感心させられた。

穂高神社、明神を経て、左岸を散策した。右岸は、うっそうとしている「深い林」対して、左岸は「白い砂の明るい林」といった印象を持った。

左岸ではズダヤクシュなどの花、上高地を代表するケショウヤナギの木々を観察することができた。

2日目は計画では徳本峠を往復する予定であったが、天気は下り坂であったため、急遽、大正池までの散策となった。

普段の山行では、行きはまだ薄暗い時間の出発であったり、帰りはバスの時間を気にしながら歩くことが多かったりと、じっくり植物観察することができなかったが、今回の観察会では時間を気にせず、疑問があれば質問したり、

ハンドブック片手に調べることができ、上高地の魅力を再認識することができた。

青年部、ワンゲル部の例会は、オンラインツールを利用していることもあり、初めて会う参加者同士でも顔見知りだ。今回初対面のメンバーとも、昔からの友人に会ったような不思議な感覚になり、懇親も節度を守りながら大いに盛り上がった。

今後は登山以外でも全国のユースメンバーとの交流を兼ねて、上高地や、全国の他の山域でも同様の植物観察会などを実施したら、今まで以上に素晴らしい、もっといろいろな楽しみのある登山ができるのではないかと考えている。

(ユースクラブ ^{いそはた} 五十幡広樹)

